

18 老農夜話

〇〇九一一。一卷。縦三四cm。紙本着色。
老農夜話は、江戸時代後期の稲作農業絵巻で、種子の準備、種浸の準備、種浸、苗代作り、種粉の催芽、種蒔、苗代田管理、本田耕起、田植え、草取り、用水管理、坪刈り（地方役人が巡回し収穫に先立ち収量を計測する徴租法）、稲刈り、脱穀、籾摺り・俵詰め、御蔵入れ、飯炊き、食事と稲花図の一九景と、それぞれの図にかかわる詞書とから成る。詞書は、天保十四（一八四三）年の中台芳昌によるもの。群馬県の滝沢氏所蔵本（群馬県立歴史博物館寄託）が、手稿本または手稿本

に最も近い写本とされ、谷城清充の落款のある農事図二〇景（貴人の食事を別景とする）を収める『日本農書全書』七一所収）。史料編纂所本は、滝沢本にある序・跋を欠き、農事図は細部で異なるところがある。詞書に「早稲は…東都に出す」「武州葛飾郡」などの字句が見えるので、本絵巻は、南関東の稲作の様子を伝えるとされる。中台芳昌は、江戸在住の下級武士と想定されている。〔参考〕佐藤常雄「老農夜話」（『日本農書全書』七一、農山漁村文化協会、一九九六）。



18 老農夜話

籾摺り・俵詰め